

# コミュニティ

community  
The New Apostolic Church around the world



2021(令和3)年第9号



(教理)

神のかたちに造られた男と女 (その1) …2

(礼拝)

五つの点でイエス様に「わかりました」と…5

(nac.today)

神の助けによって危機を乗り越える……7

(支援活動)

NAK-karitativ の活動報告 ……………8



日本新使徒教会

# 神のかたちに造られた男と女（その1）

性別間に主従関係を設ける意図など、神様には一切ありませんでした。神様は男と女を、ご自分のかたちに等しくお造りになったのです。教理要綱では、性別について、テーマとしてのみ言及しています。この「等しく」の全貌について、教区使徒会議で話し合われた内容によって明らかにします。



教理要綱では、人は神に似せて造られた、とされていて、その文脈の中で次のように明記されています。「男も女も神の姿に似せて造られたため、本質的にも神と同じである。男と女の創造については、共通部分もある一方で、互いに補完し合う役割も与えられた。そして両者共に地上を「支配」する任務、つまり地上を形成しそれを保護する任務を与えられている」（3.3.2）。教理要綱では「男も女も神のかたちに造られた」と記述されているのみです。ここでは、この重要な神学的枠組みを、補足説明します。「人が神のかたち（イマゴ・デイ imago Dei）に造られた」という考え方は、人間の自己理解だけでなく人間に内在している使命と役割を理解するうえで、極めて大切です。それだけでなく、「人が神のかたちに造られた」という考え方は、人間の尊厳——すべての人は、性別に関係なく、平等であること——にとって、聖書から見た重要な根拠と考えることができます。そのためにはまず、人が全体として神のかたちに造られていることに関連する聖書の文言と、その理解に基づいて、男と女との関係に関する聖書の文言を考察します。これにより、教理要綱の定義が聖書に基づいていることを詳しく説明できます。

創世記1章1節～2章3節と2章4節～3章に記載されている二つの天地創造の記述は、人間を被造物の一部として論じる上で、最も重要な神学的基礎となっています。前半部はやや抽象的な内容と思われる一方で、後半部には物語的な特徴があります。

## 創造に関する一番目の記述

人が神のかたちに造られたとの記述の根拠は、創世記1章26節～27節にあります。その他に創世記5章1～2節、創世記9章6節後半にも同様の記述があります。旧約聖書の研究家であるアンドレアス・シューレは、「歴史への影響という観点によるならば、旧約聖書の中で最も影響力のある言葉かもしれないと述べています<sup>1</sup>。創造に関する記述によれば、神は、六日をかけて一つまり六段階を踏んで一御言葉のみで、すべての実在をお命じになりました。あるいは形成なさいました。ここで、すべての実在が神の言葉によって成った、ということが分かります。創造の御業の最終段階—第六日—において、初めて地上の生き物をお造りになりました（創1：24－25）。そしてさまざまな動物を登場させた時に、神は人間の創造に関心を向けられました。

「神は言われた。『我々のかたちに、我々の姿に人を造ろう。そして、海の魚、空の鳥、家畜、地のあらゆるもの、地を這うあらゆるものを治めさせよう。』神は人を自分のかたちに創造された。／神のかたちにこれを創造し／男と女に創造された。神は彼らを祝福して言われた。『産めよ、増えよ、地に満ちて、これを従わせよ。海の魚、空の鳥、地を這うあらゆる生き物を治めよ』（創1：26－28）。

人間の創造は他のものと別です。このことは、神が「…あれ。／…になれ／…せよ」のように中立的なご発言ではなく、言わば「…人を造ろう」のように、ご自身に向かって語っておられるようなご発言をなさった事実からも明らかです。このご発言は、教義上の伝統として、神が三位一体の性質を持っていて、三位格すべてが創造について平等に責任を負っておられた、と解釈されています。このように、人間を造ろうとご自身に訴えることは、神がご自身を人間に直接関連付けることによって、拡大され、いわば強化されます。すなわち、人間は「我々のかたちに」造られるのです。これにより、神は人間と永続的な関係を結ばれます。それと同じように、人間も神と永続的な関係に組み込まれるのです。





神のかたちに人が創造されたということは、神から使命が与えられたことを、暗に示唆しています。それは被造物すなわち動物と地上の管理です。「これは、神の秩序と保護の働きに対応する一種の支配であり、この世に対する人間の専制支配を正当化するものではないと考えられる。<sup>1)</sup>」被造物の中で、人間は神を代表する存在であり、神のかたちに造られたものとして、神様の聖性をこの世とすべての被造物に体現する必要があります。人間は「この地上における神の代表者」であり、「被造物の管理者<sup>1)</sup>」なのです。

人間の持つ特殊な性質について、詩編8編6～7節は次のような記述を試みています。「あなたは人間を、神〔英語訳=天使〕に僅かに劣る者とされ〔口語訳=少しく人を神よりも低く造って〕／栄光と誉れの冠を授け／御手の業を治めさせ／あらゆるものをその足元に置かれた。」

続いて、神様はご自身が目指したことを実現されます。神は人間を「ご自分のかたちに」、「男と女からなる複数の存在として<sup>2)</sup>」創造されます。最初は「男」という言葉が総称として使われ、後に「男と女」という生物学的分類によって初めて具体的な意味を持つようになります。ですから、神のかたちに造られた人間は、初めから本質的に両方の性を併せ持っているのです。「男と女は共に神の栄光を反映し、共に神の創造物を伝播する…。人間に勝る唯一の存在は神である。したがって、人間は神と世界の間立つ。<sup>3)</sup>」男であれ女であれ人間全般は、神のかたちに等しく造られています。男女ともに神と同一の一つまり直接的で無条件の一依存関係にあります。その結果、人間を構成する男と女は、被造物を「支配」し、被造物の中で神を代表するという、被造物における同じ任務を授かりました。それだけでなく、男と女という複数の実在は、人間が自己中心的であったり、自ら孤立を選択したりした状態では、人間性一つまり神のかたちに創られたという事

実——を必ずしも發揮できないことを示しています。この複数の実在は、「両者が『あなた』と呼び合うことで、はじめて具体的になる<sup>2)</sup>」のです。従って男と女、女と男が一緒にいるのは、最初から交わりを持つように造られているからです。

男と女は神から祝福され、次のような言葉と使命を受けました。「産めよ、増えよ、地に満ちて、これを従わせよ。」人間は、歴史の中で被造物の中で神を代表するという神の使命を果たすために、繁殖するという命令を与えられています。創世記1章28節「これを従わせよ」という言葉はどちらかというところ攻撃的に思えますが、これは6章9～12節の文脈で読むべき、とシューレは指摘しています。つまり人間に与えられた支配の使命は、「暴虐の広まりを阻止鎮圧する<sup>1)</sup>」ためのものです。創世記1章27～28節の言葉が、5章1～2節にもう一度出てきますが、これは歴史の進展に必要な条件とみなすことができます。つまり「これは、アダムの系図の書物である。神が人を創造した日に、ご自身のかたちに人を造られた。男と女とを創造し、彼らを祝福し、創造された日に彼らを人類お呼びになった。」

まず、人間の創造を振り返り、神のかたちに、男と女という形で創造されたことを改めて強調しています。男も女も神から「人」という称号を受け、繁殖する使命を受けます。続いて、繁殖し、委託されたこの世を形成したことにより、人間がこの使命を確かに果たしたことを、系図のかたちで明らかにしています（創5：3－32）。

以上のことから、人間の性の二元性だけでなく、男女の平等性も、神による創造の御旨に基づいていると言えます。男女ともに神のかたちが成立しており、どちらも同等の尊厳を持っています。創世記1章によるならば、女性を男性に従属させることは、神と被造物の意志に反し、神による良き創造の業とは言えません。

### 創造に関する二番目の記述

最初の天地創造の記述が、この世全体に焦点を当て、その発展を六つの段階に分けているのに対し、二番目の天地創造の記述は、登場人物が互いに行動したり反応したりする、物語の形をとっています。シューレは、最初の天地創造の記述が完結型の物語である一方で、二番目の記述は「次回につづく」型のようになっている、と強調しています。天地創造に関する二番目の記述は、一番目以前に作成されたものであり、異

なる伝統の流れを汲むものであるにもかかわらず、この「続き」を構成しています。創造に関するこの二つの記述は、互いに独立して存在するのではなく、結合して新たな一つのもの形成しています。「エデンの園の物語については、一般的な生物、特に人類の創造に関する物語の解説であり、さらには譴責であると考えられる。<sup>1)</sup>」

人間の創造に関するこれらの箇所について、以下で詳しく見ていきます。

2章7節：神である主は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き込まれた。人はこうして生きる者となった。

2章18節：また、神である主は言われた。「人が独りでののは良くない。彼にふさわしい助け手を造ろう。」

2章19節：神である主は、あらゆる野の獣、あらゆる空の鳥を土で形づくり、人のところへ連れて来られた。人がそれぞれをどのように名付けるか見るためであった。人が生き物それぞれに名を付けると、それがすべて生き物の名となった。

2章20節：人はあらゆる家畜、空の鳥、あらゆる野の獣に名を付けた。しかし、自分にふさわしい助け手は見つけることができなかった。

2章21節：そこで、神である主は人を深い眠りに落とされた。人が眠り込むと、そのあばら骨の一つを取り、そこを肉で閉ざされた。

2章22節：神である主は、人から取ったあばら骨で女を造り上げ、人のところへ連れて来られた。

2章23節：人は言った。／「これこそ、私の骨の骨、肉の肉。／これを女と名付けよう。／これは男から取られたからである。」

2章24節：こういうわけで、男は父母を離れて妻と結ばれ、二人は一体となる。

2章25節：人とその妻は二人とも裸であったが、互いに恥ずかしいとは思わなかった。

7節では、人間が神によって地の塵ちりから形成されたことが語られています。神は陶芸家のように土からお造りになりました。アダムという呼称は、「この時点ではまだ性別を意味するものではなく、単にプロトプラストを示すものである」。<sup>14)</sup> アダムという語は大地を表すアダマです。このアダマから、人は造られました。注目すべき点は、創世記1章27～28節

にある人間の創造にとって極めて重要な「神のかたちに造られた」という概念が、ここでは欠けていることです。しかし、紛れもなくこれと同等のこと、すなわち、神が人間に命の息吹を与えるために息を吹き込むという事実があります。神が大地の塵から形成した姿は、神から直接命の息吹を受けるのです。神は、他のどの生き物にもなさないような、まさに緊密な絆で、人間に向き合われます。造られた大地の塵に与えられる生命の息吹は、動物に備わっているような肉体的な生命力をもたらすだけでなく、その人格に必要な条件を創出します。生命の息吹は、同時に神の息吹でもあり、被造物の中での人間が無類の存在であることの裏付けでもあります。そのため、「エデンの物語も同様に、人間の創造と、神のかたちに造られたという概念とを関連付けている」<sup>1)</sup>。人間に与えられた特別な立場、被造物の中での神のかたちとしての役割は、このように創造に関する二番目の記述でも表現されています。人間は自分の環境を形成する能力と義務を有する生きたものとなります。「神である主は、エデンの園に人を連れて来て、そこに住ませた。そこを耕し、守るためであった」(創2:15)。世話をすることも、維持することも人間に課せられた生産的行為です。ここに、創世記1章26節などで人間に与えられた「支配」との明確な並行関係が見られます。18節では、人間の人生は常に交わりや共同体の中で展開されるという、基本的な原則が表現されています。「人が独りひとりでののは良くない。」その人のために造られる「助け手」は、その人に応分の助け手であることが必要です。直訳すると「彼と同等の相手としての助け手」となります。シューレは、この「同等の相手」という語がいわば「助け手」の修飾語となっている、と指摘しています。「人間には、自分と一緒に、あるいは近くにいるだけでなく、視線がそろっていて、その存在の中でアダムが自分を認識できる…相手が必要である。」<sup>1)</sup>

続いて19節では、人間と同じように大地から造られた動物の創造について語られています。被造物において人間に特殊な性質が与えられていることは、神が動物たちに名をつけるために、人間のもとに連れて来られたことから明らかです。人間は動物に名前をつけて、被造物の世界に秩序ある体系を造りました。とはいえ、動物たちは、人間に真に対応した交わりや助けを提供することはできませんでした(20節)。

22～23節では、男にふさわしい存在、男の相手となる存在について述べられています。この「相手」は、大地の塵からではなく、人間の肉から作られています。女性が作られる肋

骨は、男性の体と女性の体が同じ種類で同じ物質であることを表しています。人間とその相手との肉体的な一体感は、次の節で強調されています。「これこそ、私の骨の骨、肉の肉。／これを女と名付けよう。／これは男から取られたからである。」それまで性別を意識することなく存在し、いわば性の可能性を内在していた男性であるアダムは、自分に似た相手において、自分を「男」、相手を「女」と表現し、認識できるようになりました。両者の間には物理的な一体感があります。言わば素材は同じです。こうした流れにおいては、神の創造行動に基づく男と女の間には、いかなる序列のような概念も、一切通用しません。そうしたことと関係なく、23節では、男は、自分と同じ相手ができることに喜びを表しています。

23節では男女の一体性を肉体の共有によって説明しています

1 アンドレアス・シュール、「先史時代」（創世記1～11章）、チューリッヒ、2009

2 ヘルマン・シュティンクハンマー、「創造神学入門」、ダルムシュタット、2011

3 ヘルベルト・ハーク、「聖書辞典第二版——創造の過程」、アインシーデルン、フライブルク、ケルン、1968

4 ここでいうプロトプラストとは、まだ性別が区別されていない人間の原型を指すと理解される。

が、24節では（「こういうわけで、男は父母を離れて妻と結ばれ、二人は一体となる」）、男女の一体性は欲望の結果として、つまりお互いの魅力と相互依存によって生まれるとしています。これは、男女の間に存在する特別な感情的関係を意味しており、親族関係よりも近い関係にあります。

要約すると、創造に関する二番目の記述は、女性が男性に従属することを示唆するものではないということです。創世記2章によると、人間は最初単独で存在し、まだ性の区別はありませんでした。自分に似た相手がいませんでした。そのため、神は人間の孤独を克服するために、同等の権利と尊厳を持つ相手を創造されました。男と女は、お互いに助け合い、相手が神に喜ばれる良い人生を送れるよう行動するために、お互いのために造られたのです。

## 五つの点でイエス様に「わかりました」と

イエス様はどのように働かれ、何をお望みで、私たちをどこへ導こうとしておられるのか—これらは、イエス様ご自身が私たちに残して行かれた指針によって示されています。そしてその指針は、イエス様ご自身によって築かれた交わりの中で展開されます。「決意」をテーマにした礼拝説教です。

### エフェソの信徒への手紙 | 章 18 ~ 20 節

**「心の目が照らされ、神の招きによる希望がどのようなものか、聖なる者たちの受け継ぐものがどれほど豊かな栄光に輝いているか、また、私たち信じる者に力強く働く神の力が、どれほど大きなものを悟ることができますように。神は、この力ある業をキリストの内に働かせ、キリストを死者の中から復活させ、天上においてご自分の右の座に着かせ、…。」**

2021年2月7日、主使徒はドイツのザールブリュッケンから、主にオランダの会衆に向けて、オンライン礼拝を執り行いました。

聖句によると、聖霊は私たちの心の目を照らすものです。これはどういう意味でしょうか。聖書でいう心とは、決意という座です。一言で言えば、「聖霊に照らして決意する」ということです。

### 希望から準備へ

神様は私たちを御国へ導こうとしてくださいます。御国では、神様と交わりながら生きていくことができます。悪から救い出されて、自分の仲間と完全な交わりを享受することができます。





ます。これは未来に関するのですが、あいまいな約束ではありません。この約束は、イエス・キリストが死なれ復活なさったのと同様に、必ず実現するものです。イエス・キリストはこの未来が来ることを保証しておられます。このことを私たちが知っていることにより、物事を判断します。未来を見つめ、未来のために準備をするのです。

### 栄光から誠実へ

聖霊は、私たちがイエス・キリストを悟れるように、導いてくださいます。イエス様の愛が私たちにとっていかに偉大かを教えてください。そしてこれによって、私たちはイエス・キリストと共にいたいという気持ちになります。キリストの豊かな栄光を悟った私たちは、最後まで誠実であり続けようと決意します。

### 力から信頼へ

これは、神様の全能性がイエス・キリストにもたらした効果です。イエス様は死に勝利されたことで、天にお帰りになり、御父と共におられます。そして、神様はその力を、私たちに注いでくださるのです！私たちはこのことを自覚し、神様を

全体的全面的に信頼することを、改めて決意します。

### 信仰から積極的な愛まで

この力は、信じる人だけに効果をもたらします。ですから信じようと決意します。イエス・キリストに喜んでいただく確かな信仰は、愛を通して働く信仰です。私は、神様の万能性が効果をもたらすように、愛によって働きたいと思います。

### もたらされている効果

イエス・キリストの力は、キリストの教会で活動しております。神様の万能性がイエス・キリストにおいて発揮されたのと同様に、キリストの力はその会衆の中で発揮されます。これには三つの意味があります。

- 物事がうまくいかない時や成功の兆しが見えない時があります。しかし、キリストが働いてくださることに変わりはありませんし、イエス様を止められるものなど、何一つありません。ですから私たちは決意します。「キリストの御業への奉仕を続けよう」という決意です。
- キリストの教会で、救いに必要なものをすべて見つけることができます。ここでも私たちは決意します。「祝福を百パーセントいただこう」とする決意です。十パーセント、三十パーセントではなく、百パーセントいただきたいと思えます。
- 私たちに一致を促し一致を実行させてくれる、キリストの力が働いています。キリストの力は強いため、分裂を生じさせるあらゆるものから克服できます。ここでも私たちは決意します。「会衆の一致のために貢献しよう」という決意です。

以上、三つの決意が必要です。そのためにキリストが助けとなってくださいます。

## まとめ

**聖霊はキリストの栄光、キリストの御旨、キリストによる救いの働きを、私たちに明らかにしてください。私たちは聖霊に照らしていただき、最後までキリストに従い、信仰と愛をもって仕えることを決意します。**

# 神の助けによって危機を乗り越える

「どうして？」皆が抱く疑問です。ある人は好奇心で、ある人はがっかりした気持ちで尋ねます。今回は、説明のつかないことにどう対処すべきかについて、その説教の一部を紹介します。



2021年7月11日の日曜礼拝は、いつもと少し違っていました。主使徒はチューリッヒ（スイス）の祭壇に立ち、ジョン・クリール教区使徒はシルバータウン（南アフリカ）から奉仕しました。音楽奉仕もシルバータウンから行われました。そしてザンビアと南アフリカの兄弟姉妹はそれぞれの教会や家庭で、ラジオやテレビ放送を通じて礼拝に出席しました。礼拝のための基調聖句は詩編73章23～24編が引用されました。「しかし、私は常にあなたと共にある。／あなたは右の手を捕らえてくださる。／あなたの計らいは私を導き／やがて栄光のうちに私を引き上げてくださる。」

詩編の記者であったアサフとヨブは運命を共にしていました。二人は神様の愛に疑問を抱いていたのです。神様に仕える人より悪人のほうが良い人生を送っていたり、あるいは次から次へと説明のつかない不幸が襲いかかっていたりしていたためです。

## 不確実性と疑問

こんにちの信徒にも、同じような疑問が襲いかかります。例えば、

不幸や悲劇が襲いかかって来た時。「どうして祈りを聞いてくださらないのですか。」「どうして助けてくださらないのですか。」

悪人の繁栄を見せつけられている時。「神様の戒めを気にかけていない人が、良い人生を送っている。彼らは金持ちで、健康で、

何でも手にしている。それに引き換え、自分は何一つ持ち合わせていない。」

信仰に忠実な人が必要としていることに教会が応えていないを感じられる時。「天国のことや未来のことより、今のことを語ってほしい。今、助けが必要なのだ。」

教役者や教会員が不完全であることにがっかりした時。「教役者や兄弟姉妹は不完全そのものだ。起こるべきでないことがたくさん起こっているではないか。これで主の働きと言えるのか。」

## 応急の処置

兄弟姉妹の皆さん。私たちはどうすべきでしょうか。ヨブやアサフのように、賢くあるべきです。すべてが混乱している時や答えや手引きがない時は、

神様とのつながりを維持しましょう。あきらめてはいけません。神様への語りかけを維持するのです。神様にすべてをお話ししましょう。あなたが満足していないことをお話ししましょう。神様の愛もご臨在も信じられないことをお話ししましょう。祈りを通して神様に話してください。

神様に、説明を求めるのではなく、助けてくださるよう祈りましょう。そして聖霊から答えがいただける機会を窺ってください。聖霊からお答えをいただけるまでは、時間と沈黙が必要で

落ち着いて考える時間を作りましょう。皆さんの魂、皆さんの信仰について考えてください。そして聖霊が皆さんの心で働いていただけるようにしてください。聖霊は答えをくださいます。可能な時はできるだけ教会へ行って御言葉を聞いてください。

## 永続的な支援

直接の霊的失望以外での打開策のない疑問、苦しみ、失望に、どう対処すべきかについても、勧めがあります。アサフは、自分の苦しさばかりに目がいついたわけではありません。

彼は家を出て神殿に向かいました。別の視点を探ったのです。そして聖霊もこんにちの私たちにこのことを教えておられるのです。

不幸は罰ではなく、墮罪の結果です。皆さんのおかれている環境は、必ずしも皆さんの行いに起因するものではありません。ほかの人も同じような状況にあるのです。私たちは皆違いますから、罪人が罰を受け、信仰深い人が祝福されるわけではありません。

神様の愛は、私たちが苦しみに遭わせないようにするものではなく、その苦しみを乗り越えられるようにしてくれるものです。考えてみてください。御子イエス・キリストも苦しみを受けられましたが、決して神様の愛や配慮が足りなかったからではありません。

イエス・キリストは私たちが悪から救済しようとしておられます。ご計画について考えてみましょう。悪魔との断絶を願っ

ておられます。人間を罪の力から救い出そうとしておられます。罪に支配されたこの世から、皆さんを導き出そうとしておられます。そしてはや苦しみのない御国へ導こうとしておられます。

神様はご自分の民が受ける猛攻を警告しておられます。覚えておいてください。「自分を信じて従う者は攻撃を受ける」とイエス様は言われました。攻撃を受ければその都度苦しみを覚えます。悪魔はその苦しみに付け込んで信仰を破壊しようとするのです。

覚えておいてください。私たちが弱くなったり疑問を持ったりするのを、主は責めたりなさいません。絶えず主に語りかけましょう。説明を要求するより、謙虚な姿勢で来ていただけるよう、寄り添っていただくよう、主にお願ひしましょう。神様の真の姿を知っている人は、神様を信頼することができます！

(7月28日 nac.today より)



新使徒教会の支援団体 NAK-karitativ は、西アフリカに位置するブルキナファソ共和国が直面している飢餓の危機を打開するために、さまざまな支援策を講じています。まず、ゴマの栽培を支援し、農業協同組合や貯蓄信用組合を設立しました。遠く離れた地域に行くには、道路や水路を使って長い距離を移動します。

#### コミュニティ

2021(令和3)年第9号・日本新使徒教会発行

日本小教区主任牧司：門平 彰弘 (E-mail: kadohira.nac@icloud.com)

多摩教会 〒206-0014 東京都多摩市乞田1320 Tel. 042-374-0070 (日本小教区本部)

松山教会 〒799-2468 愛媛県松山市小川甲110番地17 Tel. & Fax. 089-994-3556

新使徒教会国際本部: <https://nak.org/>

新使徒教会西太平洋教区: <https://nacwesternpacific.org/>

新使徒教会日本小教区: <http://nac-japan.org/>

監修: 高島 健郎 / 編集担当: 松岡 利恭